

定例研究会要旨

日時：平成 24 (2012) 年 1 月 25 日 18:30~20:30

会場：東京外国語大学 語学研究所

題目：「人称受動と非人称受動のあいだ：ドイツ語を例として」

発表者：藤縄 康弘（東京外国語大学大学院総合国際学研究院准教授/ドイツ語学，言語学）

本発表では現代ドイツ語を例に，非人称受動の成立要件を人称受動との関連性を視野に入れながら考察した．非人称受動とは，文法上の主語を持たない受動のことで，ドイツ語の場合，助動詞 *werden*（英：become）を用いた受動態（*werden* 受動）において対格目的語を支配しない動詞をもとに極めて生産的に構築することが可能である．

他方，ドイツ語では *werden* のほか，*sein*（英：be）や *bekommen*（英：get）も受動態を形成する助動詞と見なされることがあるが，これらを用いた受動態（*sein* 受動，*bekommen* 受動）は，完了相的な動詞にしか適用されず，しかも事実上，人称受動にしかならない．このことから，完了相的に条件づけられた受動態ではもっぱら人称受動が形成されるという関係を認めることができる．

この関係が妥当であるならば，その対偶として，非人称受動が形成される場合，当該の受動態は不完了相的であることが見込まれるが，実際 *werden* 受動はそのような分布を示す．マンハイム・ドイツ語研究所のコーパス（*Mannheimer Korpus I + II*）で *es wird*（英：it becomes）で始まる受動文を収集すると 100 数十例になるが，これらの事例は *es*（英：it）の指示性に依拠して，人称性のもっとも高いものからもっとも低いものまで 4 つの段階に分けることができる．そして，それぞれの段階の事例が相的にどのような動詞から形成されているかを確かめたところ，人称性の高い 2 つの段階では完了相的な動詞が優位であった一方，人称性の低い 2 つの段階では不完了相的な動詞が優位であり，しかも人称性のもっとも低い段階では，不完了相的な動詞による事例しか存在しなかった．

もっとも，これは依拠したコーパスが比較的小さかったことに起因する可能性がある．そこで，念のため，*ankommen*（英：arrive）や *sterben*（英：die）のような完了相的な自動詞が *werden* 受動に現れる事例がないかどうか，より大きなコーパスで検索した．その結果，そのような受動態の事例は確かに存在したものの，そうした事例は *viermal pro Woche* 「週に 4 回」や *täglich* 「毎日」のような頻度の副詞規定によって不完了相の一種である反復が明示される，または明示的でなくても，そのように解釈される事例であることが判明した．つまり，非人称受動の成否が不完了相によって条件づけられるという関係は妥当であることが結論づけられた．

本発表の最後には，言語類型論への展開可能性を考察した．すなわち，上記のドイツ語受動態に関する結果からは，非人称受動を許す言語体系は不完了相が無標となる体系であ

る一方，不完了相が有標となる言語体系においては非人称受動が許されないことが一般的に妥当するのではないかと考えられる．そして現に，前者の言語体系の例としてはドイツ語が，後者の言語体系の例としては英語や日本語が挙げられるのである．